

小さなパン屋さん

第7話

鉄板みがきのお仕事

ヨータンはこの頃、サンドイッチ作りが終わると、鉄板みがきのお仕事をするようになりました。

パン生地をいっぱい並べて焼くための大きな鉄板は、おうちで使っているオーブンのお皿、4枚分、いや6枚分ぐらいはあるでしょうか。

その大きな鉄板50枚ぐらいを、アルミのヘラでこすります。

鉄板には、パンを焼いたときに付いたおこげや、チョコや、チーズや、ゴマとかいろんなものがくっ付いているのです。

そのくっ付いているものを、ヘラでこそげ落とすのです。

なにせ大きな鉄板なので、ヘラでこするときは体全体を使ってがんばるので、結構疲れるのです。

ヨータンは、実はこのお仕事は、あまり好きではないのです。

なぜって、重い鉄板を作業台の下から、よいしょと上にあげなくてはいけないし、終わったら、今度は台の上から下におろさなくてはいけないからです。

でも、ヨータンはこのお仕事を、自分からすすんでやっているのです。

なぜって、ヨータンがきちんとできる、ただひとつのお仕事だからです。

サンドイッチ作りが終わると、オトーさんがいつものように声をかけます。

「ヨータン、鉄板そうじお願いね」

「はいっ」

ヨータンは、いつものように元気に返事をします。

鉄板は、マルタさんが焼き立てのパンをおぼんに乗せているテーブルの下に、30枚くらい重ねて、2列においてあります。

ヨータンはいっぺんに持てないので、3枚ずつ持ってテーブルの上に置いていくのですが、このときは、ノッピーとポックーが手伝ってくれたりします。

2人は7枚くらいまとめてドンと置いてくれるので、大助かりです。

焼きあがったパンを冷ますための、棚の中にも、鉄板が入っているので、棚からも、空になって

いる鉄板を引き抜いて、テーブルの上に積み上げていきます。

それが終わったら、ヘラで削り取る作業の始まりです。

ヨータンは、ここからの作業は運動だと思ってがんばることにしています。

そして、ここからがヨータンの本業発揮なのです。

ヘラを構えたヨータンは、始めました。

『人類即神也、人類即神也、せかいーじんるいが平和でありますように』

ヨータンの持ったヘラは、調子よく鉄板のおこげを削り取っていきます。

1枚終わったら、下のゴミ入れにコンコンコンと鉄板をたたいておこげを落とします。

終わった鉄板は、横にずらして次は2枚目の鉄板です。

『人類即神也、せかいーじんるいが平和でありますように』

コンコンコン

こんな調子で鉄板は次々と横に積み上がっていきます。

それが終わると、今度は布で鉄板をふくのです。

『人類即神也』

1枚が終わると、それを今度は逆のほうに積み上げていきます。

2枚目『人類即神也』

3枚目『人類即神也』

こんな具合で鉄板みがきは毎日調子よく進み、それと同時にオカーさんからのおこごとは、ほとんどなくなっていきました。

でも、たまーには、さすがのオカーさんも思わず言うてしまうことがあるのですが。

「ヨータン、サンドイッチの卵ちょっと多いかな」って。

つづく

ちいさなパン屋さん

第8話

ヨータンの血液型

ヨータンが、ちいさなパン屋さんに来て、3か月が過ぎました。

もうみんなとも仲良くなったし、じょうだんも言えるようになりました。

サンドイッチづくりは、まだじょうずとはいえませんが、パタンと倒れるのはなくなりました。

ある日、ハニーがヨータンに聞きました。

「ねえ! ヨータンの血液型って何型?」

ヨータンは答えました。

「A型よ」

「えっ うっそー」

ハニーは、目をまんまるくして、もう一度聞きました。

「ほんとうにA型?」

「間違いない?」

ヤッシーも、びっくりしたように聞きました。

「間違いないよ」

ヨータンは、いつも言われるのです。

「A型に見えない」って。

そう!、ギスギスしているヨータンや、なんでもカチっとしていないと気がすまないヨータンは、もういないのです。

ヨータンは、ずいぶん前に、こんな事を発見したのです。

『自分は、何かを判断するときに、ひとつの物差しで全てを計っている。それって損だ』。世の中には15センチとか、20センチ、30センチの物差しや、巻尺とか三角定規とかいろんな長さの物差しがあるのに、ヨータンの持っている物差しは、ひとつしかないよって。それって困るよね。

ヨータンはある日、ひとつの物差しを自分でこしらえて、それで枠を作って、その中に自分をはめようと、必死になっている自分を見つけたのです。

それまでのヨータンは、自分で作ったこの物差しが、最高の物差しだと信じきっていました。そして、その物差しにあてはめて、全てを判断していたのです。

だから、ヨータンの物差しと同じ物差しを持っていない人は、ヨータンにとって、とんでもない人だったのです。

ヨータンはいつも、その物差しを振りかざしていました。

そして、自分と同じじゃない人を、批判していたのです。

我慢できない時もありました。

ヨータンは、自分で作った物差しと枠の中に、自分が入りきれなくてイライラしていたのです。

そりゃあ、入れられそうもない小さな枠を作ったんだから、入れるわけもなく。

それでも必死になるものだから、同じ枠に入らない人はイライラするし。

ましてや枠すら持っていない人なんかは、信じられなくて、そんな人に出会ったりしたら、ヨ

ータンのイライラは、頂点に達するのです。

でもヨータンは、いつも「世界人類が平和でありますように」ってお祈りをしていたおかげで、

世界平和のお祈りの光が、ヨータンの物差しを照らし出してくれたのです。

『ヨータン! その物差しは、小さくて不自由だよ』って。

それでヨータンは、気がついたのです。

『短い線を引くときは、大きな物差しでは引きにくい。

校庭に、ながーい線を引くときは、巻尺がいるよね。

用途に応じて、いろんな物差しがあるんだ。

持っている物差しは、人それぞれなんだから、必要に応じて、必要な物差しを使えばいいんだ。』

『じゃあヨータンが作った息苦しい枠は、はずせばいいんだ。』

『枠は、世界平和のお祈りの光が消してくれるよ。』

『どうぞこの枠が消えますように、世界人類が平和でありますように、

無限なる愛』

『簡単だ!』

『枠が見える度に、これをやればいいんだ』

気がつくと、ヨータンの中の枠も、物差しも消えてなくなっていました。

そして、ヨータンの血液型は

「エッ?型」って

言われるようになっていたのです。

小さなパン屋さん

第9話

無限なるエネルギー、 無限なるパワー

町の通りのかどっこに、小さなパン屋さんがありました。

この小さなパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンを作っていました。

でも、みんなは自分が神様だということを知らないのです。

ただひとり、おっちょこちょいでドジなヨータンだけが、そのことを知っているのです。

きょうのヨータンは、ものすごいドジなのです。

ただでさえドジなのに、きょうはものすごいのです。

パンのみみは、ポロポロ下に落とすし、ウインナーを切ればやっぱり落とすし、レタスも落ちちゃって……。

「ヨータン、卵サンドにどうしてチーズはさまなかったの？」

お店に、トマトサンドを持って行ったハニーが、ヨータンの作ったサンドイッチの中に、チーズが入っていないのは、何か訳があると思ったのです。

サンドイッチ作りがなれてきたヨータンは、ハニーほど早くはないけれど、それなりに毎日をこなせるようになりました。

そんなヨータンなので、以前のようにチーズを入れるのを忘れたとは、ハニーは思わなかったのです。

「あっ! 忘れた」

ヨータン正直です。

「ぶっ 忘れた？」

「えっ 忘れた？」

ハニーとヤッシーに笑われてしまいました。

この頃は、ハニーもヤッシーも、ヨータンのドジを楽しんでいるみたいです。

ヨータン、きょうは寝不足なのです。

きのう、深夜番組がおもしろくて、夜ふかししたのです。

でも、そんなことみんなには言えません。

頭がボーっとしています。

『いけない、いけない、このままじゃみんなに迷惑かけるよ』

『なんとかしなくちゃ』

『なんか、エネルギー不足って感じ』

『そうだ、あれをやればいいんだ』

ヨータンは、大宇宙の神様に思いを馳せて始めました。

『無限なるエネルギー、無限なるパワー、無限なるエネルギー、無限なるパワー、無限なるエネルギー、無限なるパワー』

ヨータンはずっと、繰り返し繰り返し無限なるエネルギーと無限なるパワーをとなえ続けました。

お昼近くになって、ようやく元気が出てきて、頭がすっきりしてきました。

そんなとき、

「こまったわ、どうしよう」

パックのサンドイッチを、お店に並べてきたヤッシーが、もどってきて言いました。

「どうしたの」

ハニーとヨータンが聞きました。

「お店のサンドイッチがいっぱい残っているの」

「いつもは、もう半分ぐらい売れているのに」

『しまった』

ヨータンはきょう、

「パンさんありがとう」を、

一回も言っていないのです。

「だいじょうぶよ、お昼からちゃんと売れるよ」

ヨータンは、そう言って自分の作った卵サンドを持ってお店にいきました。

『ほんとだ、サンドイッチいっぱい、作ってきたのを置くところがないよ』

ヨータンは置いてあるサンドイッチのすきまをうめながら

『パンさんありがとう、パンさんありがとう』と、ひとつずつ心の声をかけました。

それで、サンドイッチが売れたかって？

もちろん。

ただし、残っているサンドには、二度三度声をかけたけどね。

小さなパン屋さんのサンドイッチには、ヨータンの感謝の光がいっぱい入っているのです。  
その光を受け取りに、お客さんが来てくださいます。  
そのお客さんは、お客さんの守護霊様が、連れて来てくださるのです。

小さなパン屋さん

第10話

ヨータンは神様

ヨータンが、小さなパン屋さんに来て、もう半年が経ちました。

ヨータンにとっては、

「もう」、というより、

「やっと」、と

言ったほうが良いのかも知れませんが、この半年の間にいろいろなことが、できるようになりました。

なかなか覚えられなかったパンの値段も、値段メモを書いて、それを毎日読み上げることで、100種類以上のパンの値段を覚えることができました。

オカーさんに頼まれて、夕方ピンチヒッターでお仕事をしたおかげで、ピザトーストの作り方も覚えしました。

ヨータンがお店をきれいにすることを心がけたおかげで、みんながお店をきれいにするようになって、なんだかお店が、まえより明るくなったように感じます。

ヨータンがこのお店に来た頃は、みんなの雰囲気が、なんだかピリピリしていたように思えたのですが、今ではみんな、和やかな雰囲気でお仕事をしているように思えます。

ヨータンは、ずいぶんテキパキと動けるようになってきて、ハニーの胃の具合もいいようです。でも、まだまだヨータンには、覚えなければならないことがいっぱいあります。

お店のパンが少なくなると、工場から、焼きあがったパンを追加するお仕事も、ヨータンはパニックになって、もたもたしてしまうのです。

ヨータンは、ハニーや、マルタさんや、ヤッシーのように、てきぱきとそのお仕事ができるようになりたいな、と思い始めているのです。

でもオトーさんは、ヨータンの鉄板みがきが気に入っているようで、毎日必ず、

「ヨータン、鉄板みがいてちょうだい」と、

鉄板のお仕事はヨータンに頼むのです。

そんなある日、マルタさんがかぜをひいて、早引けすることになりました。

オカーさんは、

「こまったわ、どうしましょう。

だれか代わりに、もう少し長くお仕事してくれないかしら。」

オカーさんの頭に浮かんだのは、ヨータンでした。

『ヨータンなら、ピザトーストも作れるし、マルタさんの代わりに何とかなるかもしれない』。

オカーさんはそう考えました。

でも、こまったことに、きょうは日曜日です。

みんな、日曜日は用事がいっぱいあるはず。

オカーさんは、少し遠慮をしながら、ヨータンに言いました。

「ヨータン、マルタさんの代わりに、もう少し長くお仕事してもらえないかな。きょうは用事があるのかしら」。

ヨータンは、きょうは特別な用事はなにもありませんでした。

でも、日曜日にはやっぱり、のんびりしたいと思っていました。

それでも、オカーさんの困った顔を見ると、だめとは言えなかったので、

「いいですよ」

と、言ったのです。

オカーさんは、それでも遠慮しがちに、もう一度言いました。

「ほんとうに、いいの、だいじょうぶ」

「いいですよっ」。

ヨータンはそう言いましたが、このとき自分でも、おやっと思ったのです。

なんて、つっけんどんな言い方なんでしょう。

のんびりする予定だったのが、できなくなったせいで、ヨータンの正直な心が強い言葉になって、出てしまったのです。

ヨータンは、思いました。

『ヨータンがここまでになるまで、オトーさんやオカーさんは、いっぱい手助けしてくれたし、がまんしてくれたのに、ヨータンはたった一日のために、きげんを悪くするなんて、そんなの神様のすることじゃないよね。』

ヨータンは神様なんだから、「ああ、いいですよ」って、気持ちよく引き受けてあげなくちゃ。

ヨータンには、守護霊様がいつも付いていてくれるんだから、守護霊様がヨータンのために、この状況をつくってくれたに違いないんだから』。

そう思うと、ヨータンは、マルタさんの代わりになれるように今日はがんばろうと思いました。

マルタさんのかぜは、インフルエンザでした。

だから、次の日も、その次の日も、ヨータンは残業をしました。

そのおかげでヨータンは、パンの袋詰めと、お客様の依頼で食パンを1斤、カットすることを覚えたのです。

ヨータンは、最近少しわかってきたことがあります。

ヨータンは、たぶんこの小さなパン屋さんで、神様の勉強をしているのです。

守護霊様が、ヨータンに一番ふさわしい場所を選んでくれたのです。

守護霊様は、ここでヨータンが立派になるように、見守って、そして助けてくれているのです。

ね、守護霊様!

小さなパン屋さん

第11話

神様のお仕事

ヨータンは、小さなパン屋さんに来て、1年が過ぎました。

サンドイッチ作りも、なんとかテキパキ？と、こなせるようになって、ハニーやヤッシーとも冗談交じりのお話ができるようになりました。

今は、朝の少しの間と、夕方忙しいときは、お店に出てレジを打ったりしています。

そんなときは、お客様一人一人に、

『無限なる感謝、人類即神也』を  
捧げています。

ヨータンは、ここで仕事をするようになって本当によかったと、最近つくづく思うのです。

なぜなら、ヨータンの得意な、ながらの祈りが、したい放題だからです。

サンドイッチを作っているときは、

『無限なる感謝、パンさんありがとう』。

鉄板削りのときは、

『人類即神也』。

お店でも、

『人類即神也、無限なる感謝』。

ヨータンは、我即神也として、神様のお仕事を十分にさせて頂ける職場を、守護霊様から戴いたことを、最近になって実感するようになりました。

「我は神を見たる」と、

思っただけのように、ヨータンはやっぱり、ながらの祈りを友として、毎日コツコツと、やっ  
っていこうと思っています。

ながらの祈りが祈れるときは、守護霊様、守護神様と、自分の本体と一つだということを、ヨー  
タンは知っているのです。

それは、ヨータンが長い間やってきた、ながらの練習のお陰です。

ヨータンは、神様の光を、周りにいっぱい放射するのが、ここでの本当のお仕事なのだと思  
うようになりました。

だから、ヨータンはお店で、みんなに心の声をかけます。

『みんな光を浴びにおいで』って。

そして、ヨータンはもうひとつわかったことがあります。

それは、おうちでも、ながらの祈りを、もっとやったほうがいいんだという事です。

おうちのみんなとは、とっても縁が深い。

だから、みんなの縁に、振り回されてしまうことがとっても多い。

だから余計に、おうちで祈って、縁をきれいにしていかなくちゃ。

おうちこそ、とってもだいじな祈りの場なんだ、と思うようになってきたのです。

今までのように、お風呂や、トイレや、寝るときだけじゃなくて、

『パパさんの側でも、兄弟の側でも、祈ることがだいじなんじゃないかなあ。

とにかく、やってみよう』。

まずは、練習、練習！

小さなパン屋さん

第12話

ご機嫌ななめの、ハニー

最近のハニーは、なんだか毎日いらいらしています。

ハニーの隣で、サンドイッチを作っているヨータンは、時々ヨータンのところにやってくるイライラは、実はハニーのだということ、今日知りました。

実は、ちょっとしたアクシデントで、ハニーがイライラを爆発させてしまったのです。

その日は朝から、どうしてイライラするのか不思議に思っていたヨータンでした。

ハニーが爆発したお陰で、これは、ハニーのイライラだった事がわかったのです。

ヨータンにしてみれば、些細なことなのですが、ハニーにとって、とても重大な事だったようなのです。

えっ、どんなことかって？

いつもヨータンが作っているパックのサンドを、ハニーの向こう隣にいる、ヤッシーが作ってくれたのです。

朝から忙しくて、遅れがちになっていたヨータンの分担を、やさしいヤッシーが手伝ってくれたのです。

でも、自分の仕事に必死になっていたヨータンは、いつもの順番通りにパック用の食パンを少し切ってしまったのです。

いつもは、これ作ったからねって、声をかけてくれるヤッシーなのですが、今日に限って声をかけるのを忘れたのです。

「ヨータンは、他の人の仕事は見えないの」って、ハニーに叱られてしまいました。

「すみません、他の人のを、見る余裕がないもので」とヨータンは謝りました。

ヨータンは、小さなパン屋さんに来て、もう1年以上経っています。

サンドイッチ作りは、こなせるようになりましたが、まだ手早くできないのです。

最近は、朝8時頃まで、お店に出ることが多くなって、お客さんが多いときは、ハニーが来るまでに1袋のサンドイッチもつukれないときがあるのです。

そんなときヨータンは、時間内にサンドをつくらなくちゃと必死になって、余計に余裕がなくなってしまうのです。

なぜって、早くしないと、ハニーに叱られてしまうからです。

そんなしょうたいが最近多くなっているのです。

ハニーは、もたもたするヨータンにイライラするのでしょうか。

でも、ヨータンは、ハニーのイライラを、そんなふうには考えませんでした。

ハニーの心の中に、もっといろいろな、複雑な感情が、からみあっていて、それを、ヨータンにぶつけているように感じるのです。

それと、もうひとつ。

いつも、サンドイッチを作りながら、お祈りをしているヨータンの光が、どうやらハニーの心にも光を送ったようなのです。

『ハニーは、光明に照らされて、心の奥に隠れていたものが、表に浮かび上がってきているのではないのかな。』

ヨータンは、そう思いました。

『ヨータンがんばれ！

我即神也として働く、絶好のチャンスだぞ。』

『五井先生がなさったように、ハニーの業に捕らわれることなく、ハニーの業をしっかりと捕らえて、消えてゆく姿として、消していく、神様としてのお仕事の練習だ。』

『しっかりやらないと』

『業に負けてしまわないように、がんばらなくっちゃ。』

あしたから、消えてゆく姿で、世界平和の祈りに専念だ。』

こういうとき、ヨータンってなぜか、燃えるのです。

そして、次の日からヨータンは、祈りにエンジンをかけるようにしました。

ハニーの波動に負けそうになった時は、

『無限なる感謝、無限なる感謝、無限なる感謝』と、

グィン！ グィン！とエンジンをかけるように祈りました。

そして、ハニーの感情がヨータンに向けられたときは、余計に

『無限なる感謝、ありがとうございます』と、

感謝で返すことにしました。

そのうちに、ヨータンは、

『ありがとうございます』って返すときに、力を抜くと、

ハニーの波動がずっと消える事を発見しました。

そうやって、ヨータンのハニーに対する感謝の修行は、毎日続いたのです。

小さなパン屋さん

第13話

ハニーお元気で

思えば、辛い1年半だったようにも思います。

でも、お陰でヨータンはいろんな勉強ができました。

そして、いろんな体験もしました。

きょうはハニーとお別れの日です。

ハニーは、おうちの事情で、パン屋さんを辞めることになったのです。

「ハニー、いろいろお世話になって、ありがとうございました」

ヨータンは丁寧にお礼をいいました。

ハニーのお陰で、いろいろなことが体験できました。

人間が持つ、さまざまな感情。

その感情は、幾重にも複雑にからみ合っていて、表面に出てきた感情は、その奥にひそむいく

つもの想念をおおい隠し、そして、自分を偽り、ごまかしてしまう。

ヨータンとハニーとの間で起こったさまざまな問題は、

二人の過去世の因縁の消えてゆく姿であり、

ヨータンの我即神也の練習であり、

ハニーの消えてゆく姿であり、

ヨータンの消えてゆく姿でもあり、

いっしょに働くみんなの消えてゆく姿であり、

ヨータンが神を顕す場でもあり・・・・・・。

神様の方程式は、一を加えることによって、プラスの影響を広げてゆくすごさを、改めて感じました。

次の日、ハニーがいなくなって初めての日、ヨータンはまた、新しい発見をしました。

『ハニーの感情が、この場に残っている。』

『そして、その感情に振り回される人がいる。』

ヨータンは、人間が放った感情想念のすごさを初めて感じました。

『この想念、きれいにしなくちゃ』

ヨータンは、祈り始めました。

『世界人類が平和でありますように  
無限なる感謝、無限なる光、無限なる愛。』

『あれっ!』

『今まで無限なる感謝だけで祈ってきたのに・・・。』

『そうか、これからはいろんな祈りができるんだ。』

感情が激しいハニーは、昔のヨータンによく似ていました。

だから、その感情がヨータンに向けられたのかも知れません。

それは、ヨータンの過去が、消えてゆく姿でもあったのです。

そして、ヨータンは、その修行を卒業できたのかも知れません。

そして、ハニーは、次の修行場へ代わって行ったのかも知れません。

そして、ハニーの激しい波動が、やわらいで、ヨータンの祈りがすんなりと出るようになったのです。

「あっ、新人のオーイさん、そのサンドはね、これをこうしたらきれいになるよ。」

「ほう、なるほど・・・ほんとだ、ヨータン教えるのがしょうずだね。」

『そうか、ヨータンの苦勞は、こんなときのためでもあったんだ。』

『神様ってすごいな。』

ヨータンは、オーイさんが悲しまないように、困らないように、いっぱい助けてあげようと思いました。

「オーイさん、ヨータンはね、一回で物事を覚えられなかったの。だから、オーイさんも、わからない事があったら、何回でも聞いてね、覚えるまで教えてあげるね」

「ヨータンありがとう」

オーイさんは、心の中でホッとしました。

ヨータンは、これからこのお店の中を、調和の光で満たしたいなと思いました。

『みんなが、みんなを信じあって、足りないところは、おぎないあって、助け合ってお仕事できれば、お仕事場は、とっても楽しい場所になる。』

ヨータンは、そう思っているのです。

『そしたら、お店のパンは、今よりもっとおいしいパンになるんじゃないかなあ。そうなったら、ますますお店は、忙しくなるなあ。』

それからのヨータンは、やはり、いつものように毎日コツコツと、ながらの祈りをふりまきました。

そして、お店で働く10人の神様の、神様の部分が、少しでも大きくなっていくように願いながら、明るくお仕事にはげみました。

しばらくして、ヨータンは、新人のオーイさんのサンドイッチを眺めながら、自分のサンドイッチを作っている自分に気が付きました。

お店のサンドイッチがどんどん売れる日は、作っても、作っても追い付けません。

でも、ヨータンが作るのも、速い速い！

いつの間に、こんなに速く作れるようになったのでしょうか。

でも、この忙しいお店で、ヨータンは、そんな事考えてる暇なんてないのです。

おしまい